

吉田知子『無明長夜』論——その物語性と構造——

田中裕之

一

吉田知子は、あまり論じられない。その名を広く知らしめることになった芥川賞受賞作『無明長夜』（『新潮』一九七〇・四）でさえ、状況は変わらない^④。そして、数少ない論考における『無明長夜』理解と評価の基調を定めたのが、三島由紀夫の芥川賞選評^⑤であった。

三島はそこで、『無明長夜』を「実存的作品で、すばらしい断片の集積」と高く評価したうえで、「できれば、断片の累積で終ってほしかった。さわりの本山の outbreak や回想の炸裂は、いかにもドラマチックな盛り上げになっていて感心しない。」と指摘した。これは、「自由意志」の産物である小説では、「自由意志」が否定された「偶然性の体現」である狂気を描くことは不可能だという、三島の小説観に基づく批判であった^⑥。わけだが、『無明長夜』においては「断片」こそが重要なのだという見解は、後の論者に引き継がれる。「たとえ作中人物の行動や出来事の粗筋を述べることができたとしても、それだけでは、とうてい内容に迫ることは不可能な小説である。内容はいくつかの挿話から成っており、その一つ一つがほとんど具象的な記述から構成されている。それでいて読んでいくと、具象を超えた暗闇のなかへさそいこまれる思いになる。」^④「幼い頃から人と会話というものをしたことのなかった、という主人公が凝視してきた一種底の知れない暗く混沌とした世界を語る面白さがこの小説のおもしろさであろう。筋立てはそのための進行役にすぎない。」^⑤「この作品の興味は、各場面の細部の描写にあるので、筋立ては作者自身さして問題にしていないうである。」^⑥といった具合である。確かに、作者自身、次のような発言を残しており、「筋立ては作者自身さして問題にしていないうである」というのは、この発言を念頭に置いてのものであろう。これは長くなければならないのです。人をうんざりさせるのが目的なのですから。だからだはてしなく続いて、いつまでたつても終らなくて、もう死ん

でしまいたくなるような、そういう小説なんです^⑦。

だが、「人をうんざりさせるのが目的」などという言葉も飛び出すこの発言を、そのまま受け取ってよいものだろうか。『無明長夜』は、「だからだはてしなく続く」「断片の集積」などではなく、むしろ「断片」と見られるものの多くが有機的に結合することで、確かな物語を形成しているとするべきではないか。三島の評以降、『無明長夜』の「筋立て」があまりにもないがしろにされてきたように思われるのだ。

そのような状況の中にあつて、久保田裕子^⑧は、「断片の集積と思われた『無明長夜』の世界の背後には、「私」と玉枝と「かれ」をめぐる、ある全体像が浮かび上がってくる。」と指摘し、従来の見解を覆そうとした。だが、結果導き出される、「玉枝の発作を見詰める「私」の非情のまなざしが「かれ」の罪障の思いと交錯し、玉枝との共感的世界が、絶対的な「かれ」の存在と共に外界と「私」をつなぎ止めている。言い換えれば玉枝と「かれ」は「私」の罪と憧憬を映す鏡であり、彼らを通して「私」は生きていけると言える。」との解釈は、どうにも理解できない。「『無明長夜』では、見捨てられる者と見捨てる者の双方の罪障の思いを抱え込んだ異形の姿のまま、私」は歩き出すことを決意する。この「私」のある種の晴れやかさは、そのような「イノチ」のありようを引き受けようという揺るぎない覚悟を示している。」という最終場面の読みについても同様である。

『無明長夜』は、はたしてきちんと読まれていたのだろうか。本稿では、これまでないがしろにされてきたように思われる物語性にあらためて光を当てて、『無明長夜』を読み直してみたい。

二

『無明長夜』は、「十年ぶりに御本山へ行ってまいりました。」という「私」の

語りで始まる。語り手は「私」に統一され、外からの視点は一切持ち込まれない。御本山のある門前村に帰ってからの「私」についての語り、幼少時から帰村前までの「私」の過去についての語り、が細かく錯綜するが、「私」が意識を向ける範囲が狭いため、混乱は生じない。「私」が特に拘り続けるのは、「ひとつの確固とした不動のもの、不変真如」である御本山と「かれ」である。まずは「私」と御本山と「かれ」との関係について、その端緒から整理してみよう。

「私」にとって御本山が特別なものとなったのは、「かれ」に魅せられてからである。御本山を遊び場にしていた「私」は、八歳のときに見た「かれ」から「ひとつの確かなもの」を感じ、「あの人は何をすることも迷うことはない」と思った。以来、「私」にとって「彼の確かさと御本山の確かさは同じもの」となり、二十数年、私はずっと心の底のどこかで御本山を意識して生きてきたのだ。

「私」がこのように「確かさ」に拘らざるを得ないのは、「私」が「確かさ」とは無縁であったからにはかならない。「私」には、幼い頃から「規準」がなかったのだという。

歯を磨くときに、どのくらい力をいれるか、何回こするか、どうしても解りませんでした。「そんなことをいちいち訊く人はない、誰だつて知っていることだ」と母はうるさがりました。皆には「規準」というものが歴然とあつて人に言われなくても自然に解っているのです。私にだけ、どんな規準もありません。考えだすときりがなくなりました。

「歯を磨くこと」に限らず、「人に挨拶すること、うがい」、それら「本来にも考える必要のない決りきつた事柄」に関して、「私だけがそれを知りませんでした」というのだ。そのような「私」は、「どうにもならないもの」としての自覚を持ちながら成長していく。

どうにもならないものを引きずり歩いている。そういう不明瞭な不快感がありました。「どうにもならないもの」というのは私であり、また私の前にある途方もなく長い道なのです。

これは、「私」の生まれつきの資質として片付けるべき問題ではない。御本山があり「私」の実家がある門前村は、私の生まれ故郷ではない。戦争中、「私」は母

とともに、「父の応召後、わずかな伝手を頼って」門前村に疎開してきた。当時「私」は「二歳か三歳」。間もなく父の戦死の報が入り、母は生活のために「役場の小使」として働き始めた。「私」はもっぱら母の手で育てられたのだ。しかし、その母は、「役場の小使」として働きながらも、「小使などという職業を大変屈辱的に感じているようだ」あり、しばしば、「いざれそこへ戻る」場所であり「私」には「どことも知れぬ輝かしい場所」である「まちの話」をしたという。このような母に育てられることで、「私」に、ある歪みが生じたことは想像に難くない。

村には私たちと同じような疎開者の家族がたくさんいて、村人たちとはちがう言葉をつかい、ないまぜになった優越感と阿諛を露骨にみせていました。私は村の子供たちとも交わりませんでした。そういう疎開者の子供たちの仲間にも入りませんでした。私の容易に人となじまない陰気な性質がその第一の原因だったので、私が愛嬌のいい子供だったとしても同じことだったでしょう。疎開者の多くは売り食いで、役場の小使などになった人はいなかったからです。戦争が終って二、三年もすると彼らは町へ戻りはじめ、昭和二十年代も末に近くなった頃は、村に残っている疎開者は私たち母子だけになりました。

「私」は、疎開者の余所者であるものの、疎開者の集団に属することもなかった。「私」は村のあらゆる共同体の外部存在として成長したのだ。このような生育状況と「私」の「規準」のなさに因果関係を認めることは可能だろう。「私の容易に人となじまない陰気な性質」も「規準」のなさも、ともに母との生活によって生み出されたものと考えられる。だが、当の母は、「規準」を持たない「私」の苦しみを理解せず、「私」の訴えを「うるさが」る。「学校へ行っても家へ帰っても私には親しく話しあう人はなかった」のだ。家庭にも村の中にも、頼るべき存在ならびに自己形成のモデルを見出し得なかった「私」が、自閉的な傾向を帯びるのも当然といえよう。

「いるべき場所がないという感じ」に常につきまとわれていたとも語る「私」は、その例として、子どもの頃の葬式での出来事を挙げる。外部の人間にとっては、内部の人間にとって自然で自明なことが、そうではない。冠婚葬祭を含む諸々の

儀式においては、そのような事態が特に顕著である。「田舎の葬式には実際はがんじがらめの規則やしきたりがあったて、皆それにそって動いている」のに、「私」はその中で上手く動くことはできず、「いる場所も、することもない」状態に陥ることになる。

このような「私」は、「外界にも現実にも深い関心は抱かず、「私」がいるところも仮の場所なのでした。私はいてはならないところにいるのです。」と考える。ここで「私」が、自分の居場所を「列車の連結器の上のようなところ」だということも、あらゆる共同体の外にいる「私」の在り方を正確に表している。「私」は客車（共同体）に入れないまま、しかし列車（人生）から降りることはできないでいるのだ。

あらゆる共同体の外にいる「私」は、異形のものとしておのれを自覚する。「私」にそのような自覚を促す色彩が赤である。幼い「私」が自分の「規準」のなさについて考えたのは、赤い椿の落花を見ながらであった。「私」に最も強烈な印象を与えるのは曼殊沙華の赤であり、その赤を見ると、「私」は、自分が「一刻も静止していない」「濃密なゼラチン状の粘ったかたまりになっていくのを感じ」、「体に力を入れていないと、ばらばらにほどけて流れだしてしまう」気がする。また、ある晩秋に焚火を見た際には、「私の内部の、私とは別のところにいる生きもの」、「言葉や頭ではなく私でもないもの、私の存在そのものが闇の中の、いまはもう一点の光となった赤い火に揺り動かされて激しくおののいていた」という。「仮の場所」に生きている今の「私」もまた仮の姿であり、「私の存在そのもの」は不定形なものとして「私」の内部にあると「私」は考えるのだ^⑩。

そして、そのような自己存在の不安定さが、「私」に、確かさと安定の象徴たる御本山と「かれ」を意識させることになる^⑪。後に自覚されるように、御本山と「かれ」は、不安定な「私」をこちらの世界に繋ぎ止めるために必要な、いわば「私」の錘としてある^⑫。だからこそ「私」は、就職して毎日が仕事に追われるようになれば、「御本山」へものぼらなくなり、なにも考えなくなるのであり、「二年、三年とたつうちにかれも遠いものになり」、「幾重もの白い膜で厚く蔽われてしま」うのだ。結婚後にもやはり、「御本山は私の中で牛乳の薄皮のような平べったい膜

になって冷え冷えとしていた」。大貝町の金物店への就職から藤川村での結婚生活の間は、「私」は心身ともに御本山から遠ざかっていたのである。

とはいえ、この期間の「私」にもたらされていた安定は、相対的なものでしかない。もとより、勤めているときの「私」には、「いる場所も、することもない」という状態が「具体的なことではなくな」ったというに過ぎず、「いる場所も、することもない」という気持はずっと続いてい「たのであるし、それは、結婚生活においても同様であろう。

「私」の結婚は、「あまりにも軽々しく無造作に決った」という。「相手方の事情のために全くすばやく行われ」たということだが、その事情も「どこまで本當か解らない。確かなことは、この結婚に「私」の強い意志は認められないということである。何も語られてはいないが、母の意向は強く反映されていたのだろう。「私」は、夫の吉彦が「再婚で、彼の前の妻は原因不明の自殺」をしていることが結婚後に判明しても、「彼が変質者だ」という噂を聞いても^⑬、それらは「どうでもよいこと」、「興味のないこと」であり、「吉彦にも姑の福子にも何も不満はありませんでした」という。夫に「私ほど味のない女はどここの土地にもいない」と皮肉られることをも含め、「私」に認められるのは極端な受動性である^⑭。「私」は周囲に無関心なまま、形だけの妻と嫁を生きている。

これらの期間にあつても、「私」は、仕事の昼休みに訪れた神社では、祠の「細かい部分部分まで」「見えるはずがないのに見えてしまった」ことに「眩暈を感じ、気持が悪くなり」、「不安定に宙に浮びあがっている感覚」に襲われる。海へ行けば「ぶるぶると震えている白い丸いもの」の幻覚を見^⑮、続いて「空間に不安定な格好で宙吊りになっている自分の姿」を見る。姑の福子の勧めで始めた書道塾への行き帰りには、「自分が体を斜めにかしげ歩いていくのに気づき、「ずり落ちていくような感覚」を覚える。そして、ある日の帰り、幼児を助けようとした母親がトラックにはねられるところを目撃した「私」は、足下に転がって来た母親の顔に笑いが浮かぶのを見るのだ。

数十分歩いてから私は自分の顔に触りました。私は自分が彼女と同じ顔をしているのに気づいたのです。いいえ、そうではありません。彼女が笑ったの

は、私の顔を見て反射的に同じ表情をしたのだ。——そこまで考えたとき、私は自分が手袋を脱ぐときのように、くろりと裏がえしになるのを感じました。

「私」は、人としての倫理の枠からもはみ出していく。太田町でも藤川村でも、「私」の崩壊、不気味な内部の表出は、このように着実に進行していた。そして、夫の吉彦が行方不明になったこと、つまりは仮初めのものとはいえない一応の安定した生活が失われたことを契機に、「急に私の心の中の御本山が厚みを持ち」、「私」は十年ぶりに門前村に帰り、御本山に行くことになったのである。

三

しかし、十年ぶりの御本山は、「私」に何ももたらさなかった。このあたりから、「私」の過去についての語りは極端に減る^⑧。語られるのは十年ぶりに御本山へ行った後の「私」についてであり、その中心にあるのは、再会した「かれ」との関係の変化と、これまた再会した玉枝との間に起こった出来事である。玉枝については次節でまとめて扱うこととし、前者を見ていこう。

それでも四六時中引きずられていました。あちらにもこちらにも解決不能のものがあって、それらが不快な形で宙にもやもやと漂っている。それらを茫然と眺めて時間を過しました。

御本山へ行った後の「私」の様子である。宙に漂う「不快な形」は、もちろん「私」自身の不快と照応関係にある。すでに御本山で「私」は、「体中に「いやな気分」が詰っている」のを感じると同時に、「大氣中に「不快」の芽が充満している」のを眼にしていた。幻視と「どこかへずるずると引きこまれていく」感覚の訪れは頻繁になっている。そのような状況において、「私」は「かれ」と再会するのだが、この再会は「私」を戸惑わせる。「かれ」は「御本山で修業中にどこかに出奔し」、「二十年間行方不明だった」「千台寺の長男」であり、今は村人から「新院様」と呼ばれている。新院が「生活を持ち、人びとに一挙一動をあげつらわれているなど」ということは考えられない。「私」は、新院を疑うようになり、それとともに、「私」

の崩壊は加速する。「どんなものとも不調和な激しい赤が日毎に蔓延しはじめ」、「天も地も赤くなる。私は、じつと坐ったままで、その赤に眼をすえ」る。もちろんこれは幻覚である。「何によらず私にはぼんやりとしか感じられませんでした。」「あらゆることが遠くなりました。私は暑くもなく寒くもなく、幸福でも不幸でもなく、生きていても死んでいても違いはありません。」といった症状も現れ、記憶は断片化し、夢と現実はいぼ味になる。これらの先にあるのが、「白い闇」の世界、「無明長夜」の世界である。

どこかに大きな秤がある、と私は思いました。その秤が一方に大きく揺れまわした。ぐらりと傾きました。自分には見えないが必ずあるはずだと信じ続け、てきたものが実は無いのかも知れない。初めから無かったのかも知れない。すべて誤解だったのか。私は錯覚から出発していたのでしょうか。闇の色が変わりました。いままでが黒い闇だったならば、これからは白い闇です。黒い闇は夜が明けて日が出れば消えますが、白い闇は消えない。未来永劫に融けることはない。

新院がただの人間であり、確かさを体現するものでないならば、それは「私」をこちらの世界に繋ぎ止める錘にはなりえない。「その男がどこかにいる、と思う」と釣りのあいごとれていた「秤は、大きく傾くほかはないのだ。「私」は次のような訴えをしたためた手紙を新院に送る。

新院さま。あなたは不動ではなかったのですね。迷わぬ人ではなかったのですね。そうであってもいまさら私はあなたのことを考えるのを止めるわけにはいけません。何が何でも片方の重み、そちらの分銅の重みをなくすわけにはいけません。どんなにおそろしいものだろうと妙なものだろうと私の重さだけのものが、もうひとつの秤皿に載っていないと私は……どうぞ解して下さい。どうぞ

この手紙を読んだら新しい新院の、「わしは、あなたの父親じゃない」という言葉は、今に至る「私」の苦しみの原点を正確に指し示しているだろう。前節で、「私」の歪みの最初の原因を母子関係に見たわけだが、もし父がいたならば、「私」の幼少時はまた違ったものになっていただろうからだ。したがって、新院を錘にして、

この世界に、この「私」として留まりたいとの願いは、新院を介しての自己確立の希求だったともいえる。だが、すでに不動のものではないことが明らかになった新院に、そのような役割を担わせることはできず、新院もまた、「あなたには自分以外のものはないのだ」、「自分だけなのだ。だから、どうしようもない。」と「私」を突き放す。「あなたには自分以外のものはない」という指摘も、「私」が他人との親密な関係を構築できないという点においても、それ以前の問題として、自身を把握、確立できないために自分に拘らざるを得ない（それは同時に、新院と御本山に拘らざるを得ないということだ）という点においても、正鵠を射ていよう。新院に見放された「私」は、「新院の眼で自分を見」、「自分を嫌悪し」、「愛想をつかし、見捨て」る。八歳のときから続いてきた「私」の「かれ」は新院への執着は、ここで終わる。

新院に続いて、「私」の中で、御本山も失われる。

「お山が燃えてるぞ」と、どこかで男がどなりました。門前村で「お山」といえば御本山のことです。それを聞くと、私はほじけました。体が楽になりました。私を吊しあげていたものは、いま滅びようとしている。私は忍び笑いをはじめました。おかしいではありません。生理的に自然に笑いがこみあげてくるのです。私を人の形に貼りつけていた釘が一本ずつ抜け落ちていく。それにつれて、私はがたがたと形のないものに崩れていく。私は声をたててだらしなく笑いました。生まれて初めての笑いでした。

「私」は、人の形をした仮の姿が失われ、不定形の真の姿が現れることを自覚する。御本山という錘によって落ちることを免れ、同時に宙吊りの状態に「吊るしあげ」られてもいた「私」は、ついに崩壊する。ここでの「私」の笑いは、夫を捜して訪れた精神病院で見た、病者の笑いと同じものである。声を出して笑うことが苦手な「私」は、そのとき、「きちがいに変わったら笑えるでしょうか。ああいうように笑いたい。彼女たちのように笑いたい」と思っていたのだ。「私」は、狂気の世界へと滑り落ちる。もはや「御本山の火事がほんの小火だったこと」「私」にとつての現実ではない。「私は御本山が壮大に燃えているのを見た」のであり、それこそが「私」にとつての現実である。「私」にはもう「御本山は無い」。「私」

をこちらの世界に繋ぎ止めるものは、これですべて失われたのだ。

四

続いて、これまで触れてこなかった「私」と玉枝との関係を中心に、こちらでもできるだけ時間経過に沿いながら見ていこう。『無明長夜』の物語は、「私」と御本山・「かれ」との関係を第一の軸、「私」と玉枝との関係を第二の軸として成立している。

大貫玉枝は「私のただひとりの友達」であった。

私はひとり歩いてるとソカイノオコンジキ（疎開者の乞食）と意地悪な子にはやされました。玉枝といるとテンカンツ子バチャタリ、チャットイネ疾く去れ。イネには死ぬ、という意味もあります」と節をつけて歌われました。門前村の子どもたちは偏見の中であり、癩癩の持病がある玉枝は差別を受ける。たとえ「大きな旅館の子」であっても、玉枝は共同体の周縁に位置しているのだ。「病氣に加えて人一倍引っこみ思案で臆病な性質」でもある玉枝は、「私」の分身的存在である。二人が知りあったのは「小学校三年の初め」。御本山で「かれ」を見たのが八歳のときだから、「私」は立て続けに、対極の存在と同質の存在を知ったことになる。そして、二十余年を経て、「私」はやはり立て続けに、この両者との別れを迎えることになるのだ。

「私」は玉枝の発作を二度目撃している。一度目は小学校五年の春。「私」は発作の最中の玉枝の顔を、「一秒の何万分の一という短い時間にはっと停止した顔、いわば真空状態にある顔」として記憶する。時の停止した顔とは、他者との関係、共同体との関係、世界との関係が停止した顔であり、物としての顔である。三島は『無明長夜』を「実存的作品」だと述べていたが、ここで、玉枝の実存が顔を見せたということもできるだろう。

「私」はこの顔を、結婚後に思い出すことになる。姑の福子が用を足している手洗いの戸を「私」はうっかり開けてしまう。そのときの福子の「表情ばかりか、何もない顔」を見て、「あのときの玉枝の顔もそうだった」と思うのだ。このとき

の福子の顔が、やはり「すべてが停止した顔」、「生きるとか死ぬとかいうことの外側にある顔」であった。太真町で働いている頃、「私」は、「自分には死ぬ資格などない」、「私」には、そんな人並なことなどできはしない。とりあえず仮に、間にあわせに生きていだけなのに。」と考えていた。生きるも死ぬも、この世界で正しく生きていく人間にのみ許されるものだというわけだ。このような考えを持っていた「私」が目撃する、「生きるとか死ぬとかいうことの外側にある顔」――「停止した顔」とは、「私」の自画像に通じるものにはかなるまい。そしてまた、玉枝と福子のこれらの顔は、後に見ることになる精神病者の、「またたきもせずみつめていく」「いっばいに見開かれたまま」の眼にも繋がるものでもあろう。「開きつばなしのままの大きな眼」を持つ「彼女たちの存在の、そこにいるだけ、という脈絡のなき」は、他者との関係、共同体との関係、世界との関係を失ったものとして、「私」や発作時の玉枝とも重なる。

二度目の目撃は、「参加したというべき」ものとしてあった。太真高校での受験の日、「私」は発作を起こし倒れかかっていた玉枝の体を避ける。

私が倒れかかる玉枝の体を避けたのは決して間違えたものではありません。どこからひとつの考えが突然私の頭に入りこみ、決定的な確信となっていたのです。そのほうが玉枝によい、机の角に頭を打ちつけて打ち所が悪くて死んだとしても、そのほうがいいのだ、という考えが。複雑な数学の問題のように順を追って解いていくと、そういう答えが出ている。それを私は瞬時にやっつけたのです。

この頃の「私」がすでに「自分には死ぬ資格などない」と考えていたかどうかはわからない。だが、ここで玉枝の死を肯定しようとする「私」には、ただ一人の友達の死を願ってしまうという、人倫から逸脱した禍々しさ（それは後に、幼児の交通事故を目撃して笑ってしまう「私」にそのまま繋がっている）と、死という形でこの世界から遁走することへの憧憬が共存していただろう。

門前村に帰ってきた「私」は、やがて玉枝と再会する^⑧。玉枝は、癲癩はまだ治らないが、「それでも出て歩く」、「わざと、石のあるところや青池の縁なんかへ来る」のだという。これは明らかな死への願望である。次に会うのは千台寺近く

の淵の縁。ここで玉枝は発作を起こし、「私」は高校受験の日と同様に倒れかかってくる玉枝の体を避ける。玉枝は淵に落ちて見えなくなる。ここで「私」は、自分を「人殺し」だと思っただが、この「私」を見ているものがいた。

玉枝が落ちることになる淵は、「山の頂上附近の赤土が流れこんだ」ためか「異常な赤さ」で（ここでも赤が強調されている）、「水が増したので淵の水面の形が変わり、「眼の形」になっていた。「私」は玉枝と会話しながら「水面の枯葉の目まぐるしい動き」を見て「めまいを感じ」、「頭上に渦巻いている濁流を見る。ここでは奇妙に上下が逆転し、淵の濁流は頭上にある。玉枝が落ちた後、「私は顔をあげ、宙にひとつの形を見る。「これ以外ではあり得ないという形。必ずこうなるはずなのでした。決っていたことなのです。」と語られる「形」が何の形なのか、直接には明かされない。だが、これは「眼の形」であろう。これに先だって、新院は「私」に次のように告げていた。

「死ぬのも生きるのも、みころだと思っ。しかし、何も期待してはいけない。悩み苦しみ、とんでもない方向へいこうとしていても……小さな子供が溺れ死のうとしていても……私は見ているだけだ。仏にすれば、どれもこれも善いことなのだ。二十年前に、わしはそれを知ったんだ。黙って見ているものがある、ということを」

仏は黙って見ているだけ、そう新院に告げられていた「私」は、「人殺し」という禍々しい存在になった自分もまた見られていたことを確認するのだ。このあたりで表面化してくるのは、「私」と新院との類似である。この時点ですでに、新院は「私」同様に「無意味無益」で「不器用な人間」に過ぎず、不動の存在などではないことがほほ明らかになっていた。ここではさらに、二人が「人殺し」として重なる可能性が生じるのだ。「私」は半信半疑だったが、村人は、新院が「人殺しをして二十年刑務所に入っている」と噂していたのだから。「かれ」――新院は、「私」と対極の「私」を支える錘であるどころか、むしろ「私」と同じ側の存在かもしれないのだ。

それとは逆に、分身的存在であったはずの玉枝と「私」との距離は広がる。淵から離れた「私」は、次のような幻覚妄想状態に陥る。

大空の中央に馥郁と咲き誇っている大輪の花々がありました。豪華な花束が

五

重たげにたゆたいながら天井に浮いている。花たちは色とりどりの大小の蝶となつて無心に舞い狂い、煌めく色彩硝子の破片となつて鮮明な紺碧の空の涯に砕け散りました。その遙かな高みから露を含んだ花びらの一片が落ちてきました。激しく揺れている高い木の梢をかすめて私の眼の中にはらりと落ちました。空は晴天なのに下界は横なぐりの雨でした。私は全身びしょ濡れになりながら山道をおりはじめました。(中略)私は歩きながら自分が玉枝の名を呼んでいるのに気づきました。私はそのとき小学生の玉枝を追いかけた

いたのです。いままで一緒に遊んでいた玉枝が何の合図もなしに、いきなり「やめた」と叫んで走りだしたのです。私は驚いて追いかけてました。玉枝は小川を飛びこえて見る見る遠ざかります。幅の狭い川なのに私にはどうしても飛びこせません。私は川の縁を行ったり来たりして走りまわりながら、どうにかして玉枝を呼びもどそうと、何度も何度も玉枝の名を呼びました。

長い引用になったが、ここで「私」は、玉枝だけが見事に死んで見せたことに對する羨望と、置いて行かれた悲哀とを覚えている。この「私」は、受験時に玉枝の死を肯定しようとした「私」の正確な延長線上にある。違いは、今回は本当に玉枝が死んでしまったということだ。そして、今「私」がいる下界は激しい雨だが、なぜか空は匂い立つような鮮やかさである。新院は、「私」に、次のようにも告げていた。

「極楽浄土は、あります。あるべきだ。死ぬんだからね。誰でも……死ぬのは私のみどころなんだ。どんな死にかただろうと。だから、極楽浄土は、ある」
 「私」と玉枝の道は決定的に分かれた。玉枝は「仏のみどころ」により極楽浄土に行ったのだ。絢爛たる空の幻視は、「私」がそう受け止めているが故のものである。取り残された「死ぬ資格などない」「私」は、この後、新院を訪ねるも見放され、御本山も失う。この経緯は前節で見た通りである。こうして「私」は、完全に狂気の世界へと移行し、「白い闇」の世界を歩き続けることになるのだ^⑧。そこに「晴れやかさ」や「揺るぎない覚悟」を読みとることは不可能だろう。

以上見てきたように、『無明長夜』は、「私」の狂気への転落という結末に向かつて着実に進む物語性を有している。『無明長夜』を「断片の累積」や「いくつかの挿話から成るものと見た場合でも、それら「断片」「挿話」の多くは有機的に結合し、これまで見てきたような物語を形成している。狂気へと滑り落ちる「私」を支えていた錘としての御本山・「かれ」を失い、分身的存在である玉枝に置き去りにされることで、「私」はついに狂気の世界の住人となるのだ。

「私」と御本山・「かれ」との関係と「私」と玉枝との関係が二つの軸となつて、「私」の狂気への転落という物語をなしていたわけだが、『無明長夜』には、所々で、この二つの軸と直接関係がないかのようなエピソードも散見される。先に、「断片」「挿話」の多くが有機的に結合し、と述べたのはそれ故である。最後に、この点について考えておきたい。

代表的なものとして挙げられるのが、五年ぶりに母と迎えた元旦の朝に、ポンプの口から曇りが落ちてくるエピソードである。新年早々、「醜い大きな蛙の体液の混った水で口をすすぎ、うがいをした」ことが明らかとなり、「すがすがしい一月元旦の朝の風は一変しておどろおどろしい、なまぐさい夜中の空気にな」というこのエピソードは、御本山にも「かれ」にも玉枝にも関係はなく、「私」の狂気の進行過程とも直接の関わりがない。これを、おどろおどろしく禍々しい雰囲気づくりのためのものとか、「私」の不穏な行く末を暗示するものと捉えることもできるだろう。だが、これを、隠れていた禍々しい存在が姿を現すエピソードとしてみれば、これはそのまま『無明長夜』の全体と相似形をなすものとなる^⑨。「私」の狂気への転落は、「私」の内部に蠢いていた不定形で不気味な存在が、それまでの「私」に代わり、完全に表に現れたということでもあるのだから。

そして、このエピソードは、全三章からなる『無明長夜』の第二章の最後に置かれていて、第一章の最後には、幼児を助けようとした母親がトラックにはねられるところを目撃した「私」が「くるりと裏がえしになるのを感じ」というエピソードが置かれていた。第三章の最後すなわち作品全体の最後では、いうまで

もなく「私」が完全に狂気の世界に入りこんだ後のことが語られる。つまり、第一章、第二章の最後には、「私」の不定形で禍々しい内部が露わになっていく過程を描いた『無明長夜』の全体と相似形をなす、内に隠れていた不気味なものが外へというエピソードが、あたかも二つの紋中紋のように置かれているのだ。

夫の吉彦が「再婚で、彼の前の妻は原因不明の自殺」をしていることが結婚後に判明したり、「彼が変質者だ」という噂を立てられたり飼犬を虐待するような人間であったりしたことも、隠されていた異常性が露わになるエピソードとして纏めることができる。御本山参道入口左手にある池の、鯉の姿は見え、ただ「いきものの気配が水底から水面につたわり、そのいのちのあおりで水面がそこだけふくれあがって」たり、「底のほうで暗く澱んでいるものは鯉の姿とも気のせいとも解らない」といふ様子や、「猫好きなどころから猫勝と呼ばれて」た「白痴の乞食」が猫を殺害した（かもしれない）エピソードなどは、はつきりとした相似形にはならないまでも、やはり「私」の不定形で禍々しい内部が露わになっていく過程と共鳴するものとしてある。

『無明長夜』では、「断片」と見られてきたものの多くが有機的に結合することで、確かな物語が形成されている。それは、「私」と御本山・「かれ」との関係と、「私」と玉枝との関係を一つの軸とした、「私」の狂気への転落という物語である。「私」の狂気への転落は、「私」の禍々しい内部が露わになることでもあり、二つの軸に直接関係しない「断片」も、隠された内部が露わになる過程と共鳴するものとしてある。『無明長夜』の構造は、およそこのようなものだといえるだろう。

注

① 管見では、作品名を冠した論は、曾根博義「『無明長夜』吉田知子」（『国文学解釈と鑑賞』一九七三・五）、鈴木靖子「吉田知子『無明長夜』の私」（『国文学解釈と鑑賞』一九七六・九）、久保田裕子「『無明長夜』——原初の白い闇——」（『淵叢』四号、一九九五・三）の三本のみ。その他、第六三回芥川賞選評と書評を除けば、三島由紀夫「小説とは何か 十三」（『波』一九七〇

・九、一〇）、吉良任市「吉田知子 具象的観念の文学」（『ふるさとの文学 静岡』文京書房、一九七四・四、所収）、川村二郎「物語と告白」（『現代の女流文学 第二巻』毎日新聞社、一九七四・九、所収）、白川正芳「解説」（『無明長夜』新潮文庫、一九七五・三）等に『無明長夜』への言及が見られる。早い段階でのまとまった作家論として挙げられる折金紀男「関係憎悪の論理——吉田知子論」（『吉田知子作品選』深夜叢書社、一九七一・四、所収）には、『無明長夜』への言及はなく、唯一の単行本である庄司肇「吉田知子論」（沖積舎、一九九四・一〇）では、「なんと読んで、こちらの脳髓が拒否反応をおこすらしく、混濁した印象が残るだけで不快になる。」との理由から、まともに論じられていない。

② 第六三回芥川賞選評「甲乙つけがたく」（『文藝春秋』一九七〇・九）。

③ 「小説とは何か 十三」（注①前掲）。引用は『三島由紀夫全集34』（新潮社、二〇〇三・九）に拠る。三島は「こ」でも、『無明長夜』を高く評価しつつ、「殺人と本山炎上の妄想のクライマックス」は「むりに小説を終結させようとした作者の恣意にもとづいてある。このやうな小説は、ディテールの集積だけで十分なのであり、その最良のディテールはホフマンスタールの「チャンドス卿の手紙」をさへ思はせる。しかしクライマックスはこれを裏切るのだ。」と論じている。狂気をめぐる三島の小説観そのものは是非を論じる余裕はないが、狂気に陥った「私」は語り手の資格を持ちうるのか、という問いの有効性は否定できない。

④ 吉良任市「吉田知子 具象的観念の文学」（注①前掲）。

⑤ 白川正芳「解説」（注①前掲）。

⑥ 鈴木靖子「吉田知子『無明長夜』の私」（注①前掲）。

⑦ 「『無明長夜』の寺」（初出未詳、『猫の目、女の目』大和書房、一九七四・五、所収）。

⑧ 「『無明長夜』——原初の白い闇——」（注①前掲）。

⑨ 吉田知子作品の母子関係については、『豊原』なども交えながら、稿を改

めて考えてみたい。

⑩ 「容易に人となじまない陰気な性質」の「私」には、大貫玉枝以外に友達はいない。「私」は、自分の住んでいる家が「戦前は蚕小屋」だったということを知っているから、「自分は蚕だ」と思い込む「ひとり遊び」をする。

⑪ 曾根博義は、「主人公は「赤いもの」との出会いを通して、逆に自分がじつにあやふやな、形のないものだということを知られ、自分が刻々、溶けて流れ出ていってしまいそうな恐怖におののく。」と正しく指摘する一方で、「数々の「赤いもの」は、いずれも明らかに主人公の「機能的な眼」に映った存在そのものの、隙間なく詰まっている確かなものをあらわしている。」とする（『無明長夜』吉田知子・注①前掲）。だが、「赤いもの」を「存在そのもの、隙間なく詰まっている確かなもの」と見ることはできない。それらはあくまでもトリガーである。

⑫ 久保田裕子は、「私」の「かれ」への憧憬には、葬式での儀礼や挨拶の仕方などの外部からの強制にすぎない決めごと、無批判に従うことへの不信感が内在していると言えよう。むしろそれは慣例を自明の前提として受け入れてしまふ生き方に対する、社会批判というような明確な形をとらない漠然とした違和感と言ったほうがよい。」と論じる（注①前掲論文）が、「私」の内部に、たとえ「漠然とした」ものであれ、そのようなものを認めることは困難だろう。

⑬ 同時に、御本山は「私」に自身の不安定さを突き付けるものでもある。御本山の朱色の山門（「私はその鱗粉をまぶしつけたような乾いた色が嫌い」で「いつも微かな不快感を覚え」という。赤という色彩の持つ意味は「ここでも同じである。」を「私」はくぐる）ができない。「私」は「自分にその資格がないから」と感じ、「私は山門から拒否されている」と思うのだ。高校入学後、太呉町へ通う軽便鉄道の中では、行きと帰りの二回、「私」は御本山を意識し、「あれは単なる建物だ、他の山と同じ、ただの山なのだと思う」とも、「不動なんでものはありはしない、そんなものは虚妄にすぎないと考える」とも、「微動もしない御本山を憎み、無視しようとし」とたこともあった。

⑭ 吉彦のこのような設定は、「これでもかこれでもかの道具立てが多すぎて閉口した。」という舟橋聖一の感想（第六三回芥川賞選評「古山と吉田」『文藝春秋』一九七〇・九）の原因の一つとなつていよう。

⑮ 後に門前村で「私」は「子供相手の書道塾」を開くのだが、これも「母が私に何の相談もなく勝手に計画したこと」であり、「家を借りるのも生徒を集めるのも顔の広い母がやった」ことであつた。ここでも「私」は母に従っているのだ。

⑯ この、見えるはずのないものが見えるという事態は、門前村に帰ってからも繰り返される。また、「私」は最後には幻覚に覆いつくされ、狂気の世界へ移行してしまふのだが、そこは「白い闇の中」であり、そこでも「私」は、「透明な水の中を浮きつ沈みつしているもの」を見る。

⑰ 久保田裕子は、「私」の語りにおいては、時間は線的に不可逆的に進行するのではなく、過去も現在も時間の遠近の感覚が消滅したように、全く並立したものと描かれている。」と論じる（注①前掲論文）。確かに「私」は過去の記憶をまざまざと蘇らせるが、「十年ぶりに」という語り初めから「時間の遠近の感覚」は保持していた。むしろ、過去を語らなくなったこのあたりから、「私」の時間は澱み始める。

⑱ 久保田裕子は、「十五年ぶりに「私」と再会した玉枝は、父の死後は家の中で厄介者の立場に追いやられていた。それは夫の失踪後、「出戻りの娘」として実家の「物置兼用の三畳」で息をひそめている「私」の境遇と重なり合う。」と指摘している（注①前掲論文）。正確には、「私」が母の家に同居していたのは帰村後数か月の間で、その後「私」は自分の家を借りているのではあるが、帰村後もなお、「私」と玉枝は分身的存在であつた。久保田はさらに、玉枝は「私」の生きている原初的な世界を共有する、「自分の内部の原初の意識を反映し、拡大してみせたような存在である」とするが、根拠が薄く受け入れがたい。

⑲ 「白い闇」の世界に登場するのは、新院であり、「母に似た羅漢」であり、「玉枝に似た羅漢」であり、男女の「白痴の乞食」である。ここで玉枝は、「大願成

就し「極楽浄土へ行」ったものとして「私」に「喝采」されている。また、男女の「白痴の乞食」とは、「猫勝」と呼ばれる「門前村に住んでいる白痴の乞食」と、子供の頃に玉枝と一緒に目撃した「根上り松のところで出会った女」であろう。両者は、すでに狂気に陥っている存在として、精神病院の患者たちとともに、「私」の未来の姿を示すものでもあった。「私」は彼、彼女らの姿を「ひとつひとつ覗きこみながら歩いていく」。

なお、三島由起夫と舟橋聖一は、「夢と現実が等価のものになる分裂症の病理学的分析もたしかなら、文章もたしかで、詩が横溢している」（「甲乙つけがたく」注②前掲）、「精神分裂者の幻想小説というものは素人にも書き易いものである」（「古山と吉田」注④前掲）と、ともに「私」を精神分裂病（統合失調症）と見ている。曾根博義は「典型的な離人症患者」と見ている（『無明長夜』吉田知子「注①前掲」）。本稿では、そのような病名を用いることなく『無明長夜』を論じてきた。専門外の人間が軽々に判断すべきではないと考えたからであり、また、あくまでも虚構の存在である主人公に、実在の病名を与える必要もないと考えたためである。ただ、精神病理学の分野から『無明長夜』の「私」がどう見えるのか、興味はある。その意味では、高橋正雄「精神医学的にみた近代日本文学（第26報）——石牟礼道子・吉田知子・吉佐和子・中野好夫——」（『聖マリアンナ医学研究史』17（92）、二〇一七・三）が『無明長夜』を取り上げながら「私」にまったく触れることがないのは実に残念である。

⑳ そして、このように捉えるならば、このエピソードを締めくくる、「不透明で曖昧になった頭の中でひっきりなしに鐘が鳴り続けているのを私は聞きました。冬眠中の墓が、除夜の鐘を聞きました。背中一面に醜悪な疣を背負った大きな墓が聞きました。」という文章は、「冬眠中の墓」|| いずれは表に現れる「私」の不気味な内部、として読みうるものとなる。そうなれば、いよいよこの年それは目覚めるのかもしれないとも読め（墓が出てきたポンプは、「赤土の崖」に面した場所にある。ここにもトリガーとなる赤があるのだ。）、このエピソードもまた、狂気の進行過程に関わるものとなる。